

辻元清美の 永田町航海記

リターンズ

91

イラストレーション/石坂啓

一月二六日、日本武道館で商工会全国大会が開催。全国から集まった一万人が会場を埋め、民主・自民・公明・国新の議員五〇人近くが参加。私は初めて招待された。

そこで驚いた。谷垣禎一自民党総裁が「精進を重ね頑張つて参ります」と挨拶を終えると地鳴りのような拍手。来賓挨拶トップの岡田克也民主党幹事長より圧倒的に多いのだ。

「自民党の方がよかった?」という空気が急速に広がっている。先日ある講演で、「菅さんにはガツカリ」という声が飛んだ。「では誰が総理ならいいの」と問うと、「誰もいない」。この発言に拍手がわき、私はゾツとした。この先に出てくるのは強いリーダー待望論ではないか。

尖閣事件、北方領土問題、北朝鮮による砲撃、普天間基地問題。年末のテレビ出演依頼は、ナシヨナリズムを煽りたてるテーマばかり。円高・デフレからの脱出も容易ではなく経済状況も厳しい。歴史を振り返れば、そんな時にナシヨナリズムはファシズムに昇華

「自民党の方がよかった?!」空気蔓延 強いリーダー待望論にゾツ!



していった。

政治の役割は「路頭に迷う人を出さない」と「戦争は絶対に起こさない」だと考えてきたが、二つは関連する。路頭に迷う人が増えれば社会不安が溜まってカリスマ待望論や排他的空気が出てくる——と機中で遭遇したコラムニストの勝谷誠彦さんに話したら「欧州なら外国人排斥運動が起こりかねない。今の日本は危ない」と一致。彼は「右」私は「左」と見られがちだが現状への憂いは同じ。

処方箋は、偏狭なナシヨナリズムに警鐘を鳴らすことと「反貧困」。今年の春「セーフティ・ネットワーク実現チーム」を政府内に立ち上げ、内閣府

参与の湯浅誠さんと私で国会運営について話し合ってきた。今は小宮山洋子厚労副大臣に引き継がれ継続中。与党側にも社会的包括政策実現のための組織をつくる相談を湯浅さんたちと開始した。

同時に、社会に絆をつくるためにはNPOを元気にしなければ。政府与党内でも市民公益税制の議論を進めているが、一二月一日(二年前のこの日にNPO法施行)にはNPO議員連盟を再編して立ち上げる。共同代表に加藤紘一、江田五月。顧問に鳩山由紀夫、福田康夫。各党から枝野幸男、額賀福志郎、斉藤鉄夫、浅尾慶一郎、笠井亮、照屋寛徳、亀井静香、与謝野馨といった重量級がズラリ(敬称略)。私は幹事長、事務局長に中谷元・元防衛庁長官。「ピースボートから自衛隊出身者まで」党派を超えて結集した。具体的な政策をひとつずつ実現していくことが「いつかきた危ない道」に至らぬ方法と信じて突き進むしかない。

「最小不幸社会」とは、不幸になる原因を取り除くのが政治の役割で、最大の不幸は戦争という理念。最近菅総理はこの言葉を封印? 原点を見失わないうようにしてもらわねば、また自民党政権へと「政権交代」しかなない。

(つじもと きよみ・衆議院議員)